

## 社会の変化とことば—中国・北京 '98—

谷部 弘子

98年3月より9月まで、研修のため中国の北京に半年間滞在した。北京には80年から83年にわたって滞在したことがあり、以後何回か訪れてはいるが、長期で滞在するのは83年以来15年ぶりになる。北京に着いたのはまだ肌寒い3月半ばであった。にもかかわらず、西瓜やメロンなど夏の果物まで道端の露頭に積まれている。ここ10年の社会変化を、まず商店にあふれる物の豊かさで実感した。

今回、研修機関としてお世話になったのは、北京語言文化大学である。数年前まで北京語言学院と言っていたところで、今でもバスやタクシーで行き先を告げるときには、旧称のほうが通りがいい。北京語言文化大学は研究所や大学が集中する北京市西北の郊外にある。毎年、長期・短期合わせて3000名を超える外国人留学生と約1000名の中国人学生が学んでいる。大学には、「漢語学院」「漢語速成学院」「文化学院」「外語学院」「成人教育学院」の他、言語教学研究所や言語情報処理研究所なども置かれている。漢語学院、漢語速成学院では主として外国人留学生が中国語を学び、文化学院では主として中国人学生が中国語学、中国語教育について学ぶ。つまり、ここは、外国人に対する中国語教育（中国語では「对外汉语教学」と呼ばれているが、以下「中国語教育」とする）のセンター的存在なのである。中国語と日本語と、教える素材は違っても、同じ第2言語教育に携わる者として、当然ながら共通項は多く、今回ここで中国語教育について学んだことは大きかった。以下、中国語教育を通して見聞きしたことばと社会の問題についていくつか報告したい。

### 「文化大綱（文化大綱）」

中国語教育が一つの学問分野として認知されるようになったのは、80年代

前半のことであり、現在では日本語教育と同様、中国語能力試験（「汉语水平考试」）、中国語教育能力試験（「对外汉语教师资格考试」）が毎年実施されている。ここ10年の隆盛を反映して、教材も数多く出版されている。北京語言学院の名称に「文化」が加わったように、現在は言語学習に文化背景や社会習慣を反映させようと試みた教材が多い。すでに、漢字、語彙、文法に関しては「教学大纲」あるいは「等级大纲」が出ており、まもなく機能（「効能」）についての大綱も出版される予定だが、中国語教育で教えるべき文化項目についてはまだ模索検討中という。「文化」という語は非常に幅広い概念であり、とらえ方はさまざまである。林国立（1997）<sup>1</sup>は、「中国語教育における文化」とは、外国人が中国語を学び、理解し、中国語を用いて中国人とつきあう際に身につけなければならない言語要素の一つであるとして、「文化大纲」制定の必要性を述べている。

「音声教育が解決するのは、きれいに話せるかどうかという問題であり、文法教育が解決するのは正しく話せるかどうかという問題であり、機能の教育が解決するのはどのような場合にどのように言うかという問題である。それでは、文化大綱はどのような問題を解決しようとしているのか。簡単に言えば、文化大綱が解決しようとしている問題は、『中国人はなぜこのように言うのか』『このように言う裏にはどのような意味が含まれているのか』という問題である。」（林国立1997 p.20 翻訳筆者）  
このような観点から、林国立氏は、「文化大綱」の基本的な内容を、現代の中国人のものの考え方、心理的な特徴、生活スタイルや風俗習慣であるとしている。理論的な問題がかなり明らかになった上で制定された語彙や文法の大綱とは異なり、現段階では選択的、暫定的なものとして考えるべきだとも述べているが、社会の動的な現象を扱うだけに大綱化がふさわしいのかどうか疑問に思う。

言語研究でも、「文化语言学」「文化语用学」「跨文化交际学」（異文化コミュニケーション）と、文化をキーワードとした研究が盛んであり、言語教育への応用の議論もまた活発である。研修中、文化学院修士課程（中国語教育専攻）の授業も聴講させていただいた。そのひとつは異文化コミュニケー

ションのゼミで、院生と論文指導教授との1対1の議論の場である。その日は、文化的な背景がわからないと理解や運用が難しい語について議論されていた。学生はある中級教材の中から、主に中国固有の伝統文化を反映した事象、最近の社会的経済的な変化をもたらした新語や多義語、成語などをとりあげ、英訳が不十分であること、扱いが一面的で学習者に誤解を与えること、などを指摘していた。学生の指摘にうなずきながら、時には理論的な根拠を求めながら、指導教授はもう少し広範に文化的な要素を含む語彙や表現を収集するように指導し、「你好」や「您贵姓?」といった挨拶表現や呼称についても社会言語学的、語用論的な意味の分析を求めている。

### 「先生」「小姐」

中国語において、呼称は非常に重要である。特に、目上の人に対しては必ず、呼称によって関係を明らかにしなければいけない。中国語教科書の第1課はたいてい「你好」で始まる。挨拶の基本であるが、子供にはあまり使えない表現である。というのも、あいさつをする相手はほとんどが目上であるのだから、「好」の前には必ず「老师」（先生）「叔叔」（おじさん）など自分にとって相手はどういう関係の人間であることを示す呼称をつけなければならない。学生の身分であれば、道で先生に会って「你好」は礼を失したことになる。担任や指導教官であれば「老师好」も不適當で、「王老师，您好」もしくは「王老师！」と呼びかける。つまり、自分との関係を示す呼称で呼びかけること自体が、すなわち、挨拶なのである。簡単なことのように、「你好」イコール「こんにちは」と覚えてしまった身には、これを毎回実践するのは難しい。

通りすがりの人に道を聞く、レストランなどで従業員に声をかけるといった時も、困ることが多かった。10数年前は男女や職種を問わずほとんど一律に「同志」でよかったが、社会主義市場経済のもとではこれももはや流行らない。レストランの女性従業員には「小姐」と呼べば無難である。困るのは男性従業員がウェイターとして現われたときである。周りの中国人に聞いたところ、大きなレストランであれば「先生」と呼べばいいという。確かに、

北京語言文化大学の最新の中国語教科書<sup>2</sup>には、つぎのような対話がある。場面はホテルのフロントである。

(1) 先生，您好。(フロント係：女性)

您好，小姐，我想预订房间。(客：男性)

(2) 小姐，您好。(フロント係：男性)

您好，先生，我想预订一个房间。(客：女性) ( )内は筆者注

(1)はフロント係が客に対して「先生」を用い、(2)では客がフロント係に「先生」を用いている。別の課では、郵便局の場面で客が局員に対して「先生」を使用している。つまり、「先生」が職種や地位の上下を超えた尊称となっているのである。「小姐」も同様である。李明洁(1996)は、95年から96年にかけて上海市で行なった調査の結果から、「先生」「小姐」がもっともよく使われる一般的尊称となっていること、それらが相手に対する敬意を表わすだけでなく、話し手自身の品性を反映するものとしてとらえられていることを指摘している<sup>3</sup>。現実には「同志」という呼びかけ語を使った記憶がないという20代前半の若者がおり、さきの教材のモデル会話は社会変化の実態をいち早く取り入れたものといえる。その一方で、北京語言文化大学の郭鳳嵐氏が行った調査(調査対象は20～35歳)によれば、留学生は中国人に比べ、見知らぬ人への呼びかけ語として、年齢や地位にかかわらず一律に「先生」を用いる傾向があるという。中国人の呼称選択にはまだまだ幅があり、その点、留学生は母語文化の干渉を受け、中国語文化における「先生」の使用範囲を拡大解釈しているというのである<sup>4</sup>。

「先生」は、また別の意味で、今回中国に来てから気になることばのひとつである。毎日のように顔を合わせる宿舍の受付の女性に声をかけられた一「你先生来了」。「先生」というのは、夫のことである。15年前であれば、これは確実に「爱人(愛人)」であったはずだ。「爱人」という語は、日本語と中国語で語形は同じでも意味の異なることばとしてよくとりあげられるものの一つである。日本では夫、妻以外に愛する人であるが、中国語では夫、

妻その人を指す。夫あるいは妻、どちらを紹介するにも「我爱人」ですんだ便利なことばであった。ところが、すこし改まった場面では「爱人」よりも「我先生」「你先生」と呼ぶことが多くなった。夫が「先生」となれば、妻の呼び名も当然変わって、私は「竹中（夫の姓）太太」となってしまった。先にあげた教科書でも、学生が先生（男性）に出産の祝いを述べる箇所では「您太太」を使っている。身近な大学生に聞いたところ、親の世代は「爱人」を使うだろうが、私は「我先生」「您太太」と言うし、「爱人」よりも礼儀にかなっていると感じるという。「先生」「小姐」「太太」などは、文化大革命中、封建的と排斥され、一時期姿を消した。その文化大革命のさなかに中国語を学んだ筆者などは、「太太」などと言われると、急に資産階級の婦人にでもなったような居心地の悪さを感じてしまう。筆者にとっては古めかしい語の復活でも、20代になったばかりの彼女らにしてみれば、むしろ新しく洒落た感じのすることばなのかもしれない。

### 「妇女（婦女）」

女性を表すことばには、「小姐」「太太」など呼びかけ語として使われるもの以外に、「女人」「女性」「妇女」などがある。日本語の「女」「女人」「女性」「婦人」などと同様に、外国人にとっては使い分けが難しい。「妇女」は日本語の女性、婦人にあたり、3年前に北京で開かれた女性会議の中国語名称は「95世界妇女大会」である。中級レベルの教科書には「多くの女性は結婚しても仕事を続ける」といった例文で現れる。この「妇女」という呼称に抵抗を感じる女性が、最近増えているようだ。女性研究の指導的存在である李小江氏が『关于女人的答问』<sup>5</sup>の中で、二つの事例をあげ、この問題をとりあげている。事例の一つは、李氏らが1993年に創設した鄭州大学国際聯誼女子学院の1期生から、「妇女」ということばで私たちを呼ばないでほしい、と声があがったこと、もう一つは、陝西師範大学中文系の屈雅君助教授がある会議の席上で「『婦女』ということばは政治的な意味合いが強すぎて好きではない」と発言したことである。屈氏は、担当授業でも「妇女文学」ではなく「女性文学」と言っているという。李氏は、「妇女」が政治

的、革命的な意味を内在させるようになった歴史的な経緯や、職業をもった、いわゆる「解放された女性」が「婦女」という呼称を嫌う心理について分析し、公の文書などでよく使われる「婦女」という語を批判的にとらえながらも次のように結論づけている。つまり、「小姐」「太太」「大娘」「大姐」「女子」「女人」など多様な呼称が使える今、「婦女」だけを排斥する理由はない、多様な呼称は社会の寛容さや豊かな生活様態を示すものであり、さらにまたそれらがいろいろな形で忘れてはならない過去の記憶を呼び起こしてくれる、というのである。

「女性が天の半分を支える」（「妇女能顶半边天」）と言われた中国だが、今年も女性の就職難が紙上でもよく話題になっていた。投書の多くは、「婦女」ならぬ「女性」「女学生」あるいは「女同志」に対する差別を訴えていた。この秋、北京大学は女性学の大学院講座を設け、第1期生を募集したが、名称は「妇女学研究方向」であった。

## 「你」と「妳」

7月に入ると、外国人留学生は休みを利用して各地に旅行に出かける。長期の留学生にかわって、構内を行き交うのは4～6週間の短期語学研修の学生が主流となる。短期語学研修の一つは外国語としての中国語学習者であり（もちろん一番多いのは日本人）、そして、もう一つは共通語（「普通话」）研修のためにやってくる「同胞」「華人」の学習者である。香港、マカオなど広東語圏からの団が主である。小、中学生から教師研修までさまざまなコースがある。市内のホテルにはシンガポールの私立高校の研修団も宿泊していた。

共通語の普及の一方で、経済力がことばの浸透を後押ししているのか、南の語彙が北京でもずいぶん見聞きされるようになった。「的士」（タクシー、共通語では「出租汽车」）「巴士」（バス、共通語では「公共汽车」）は香港でよく使われる音訳語であるが、上海あたりでタクシーをつかまえることは「打的」であるし、北京でも大型バスは「大巴」である。名詞だけでなく、近くの中学校の校門には「同学请着校服」という掲示もあった。制服の着用

を呼びかけるのに、「着」（共通語では「着る」は「穿」）が動詞として用いられているのである。大学の宿舎では香港の衛星放送が見られたが、これには字幕もあって、外国人にとっては、格好の学習教材となる。ある日、日本のドラマを見ていて、字幕に「你」とは別に「妳」という文字が使われていることに気がついた。中国語は、3人称代名詞を「他（彼）/她（彼女）」と表記上区別しているが、1、2人称ではそのような区別はなかった。昨年、香港で「有」（ある）という文字を「没有」（ない）と読ませているのを知ったが、今回の「女偏のあなた」の出現はそれ以上の驚きだった。

「下岗」（レイオフ）と「再就业」（再就職）のニュースが続く一方で、「世界杯」（ワールドカップ）に国中が一喜一憂し、「上网」（インターネットへのアクセス）が急増する。一大国家事業の「高考」（大学入試）が終わったと思うと、歴史的な大洪水に見舞われ、「防汛」（増水による洪水防止）の重要性を知る。久しぶりの北京滞在は、ことばを通して隣国の見直しを迫られた半年であった。

（注1）林国立1997「对外汉语教学中的文化因素体系」『对外汉语教学与文化』北京语言文化大学出版社

（注2）郭志良主编1996『速成汉语初级教程 综合课本』北京语言文化大学出版社

（注3）李明洁1996「泛尊称选用在社会转型背景下的解释 - 上海泛尊称使用状况的社会调查报告 - 」「语言文字应用」第4期（总第20期）

（注4）郭凤岚1997「交际·关系场·称谓 - 汉语部分称谓的调查分析」『词汇文字研究与对外汉语教学』北京语言文化大学出版社

（注5）李小江1997『关于女人的答问』江苏人民出版社（女性新热点丛书）